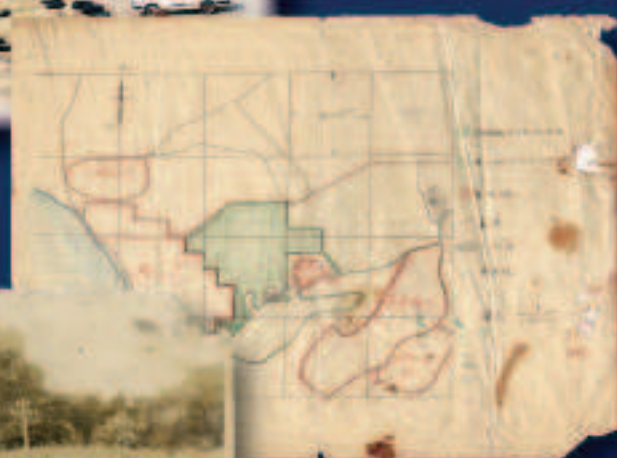


北谷町公文書館 開館25周年記念企画展図録

北谷戦後七十年余の歴史

あの日あの時・・・



北谷町公文書館

はじめに

「去る沖縄戦により戦前の行政文書はすべて焼失し、今ある行政文書は終戦の昭和20年以降の文書であり、これら限られた行政文書しか有しない本町において、せめてこれからの資料は大切に後生に伝えたい。」

「現行の行政文書保存管理体制の中で、年々廃棄予定文書が増えていき、歴史的資料として価値ある行政文書をどう残していくか。」

そういう先達^{せんだつ}の思いが一つになり、平成4年4月1日に全国の町村に先駆けて北谷町公文書館が開館しました。当館は、本町に関する歴史的資料として重要な文書等を収集・整理保存するとともに、これらの利用を図り、もって学術及び文化の発展に寄与することを役割としています。

開館から6年間は民間の建物を賃借して業務を行ってきましたが、平成10年5月の役場庁舎移転に伴って公文書館が併設されたことにより、町民及び職員に利用しやすい施設として大きく進展しました。年々利用者も増加し、町民等が様々な行政資料や歴史資料等に接する機会を得、閲覧室では町が発行した刊行物を中心に沖縄県や県内市町村等の資料が閲覧され、それらに関するレファレンスにも対応しています。

北谷町公文書館は平成29年度に開館から25周年を迎えます。

戦後の苦渋・困難を乗り越え、現在のまちづくりへと発展させた北谷の先人たちの熱い思いや行動力を感じ、さらなる北谷町の発展に寄与することを目的に、25年間の業務の集大成として記念事業を開催します。

さいごに、本企画展開催および図録刊行にあたり、各種資料・写真等をご提供いただいた沖縄県公文書館をはじめ、当館へ資料をご寄贈くださった関係者の皆様に、改めて深く御礼申しあげます。

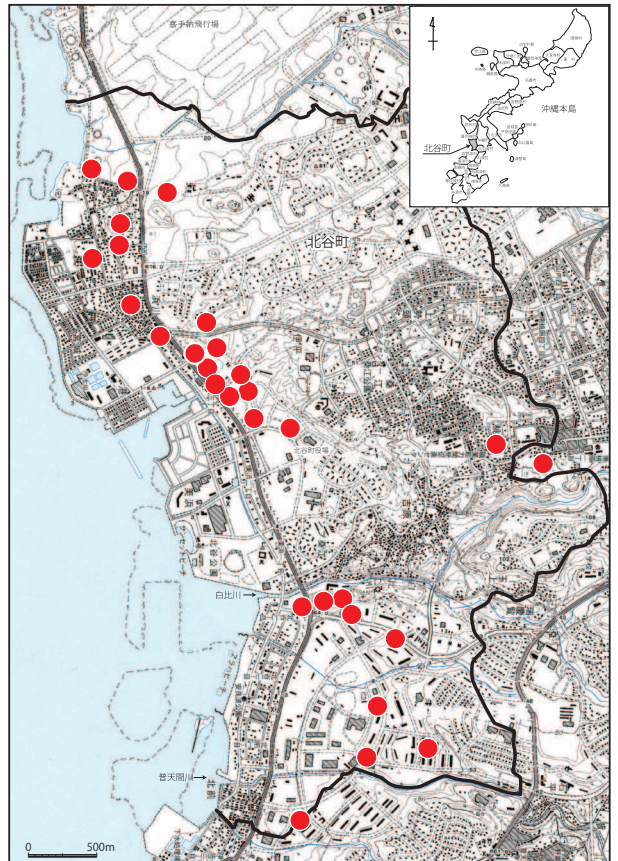
平成29年12月

北谷町公文書館
館長 松田 つや子

近世以前の北谷

先史時代 は文字などの記録が現れる前の頃をいい、本土の旧石器時代から平安時代までが、沖縄の先史時代にあたります。人々は**竪穴式住居**を台地のふちや海岸ちかくの砂地に立てたり、**岩陰**を利用した**洞窟住居**などをかまえていました。基本的に**狩猟・漁労・採集**で生活しており、なかでもオキナワウラジロガシのような保存がきいて、栄養のあるドングリの仲間を主な食糧としていました。北谷町の**伊礼原遺跡**では**竊**に入ったままのドングリが水に漬かった状態で発見されています。狩猟の獲物は**イノシシ**が中心だったらしく大量の骨が出土しています。海ではサンゴ礁域や湾の内側にある浅い海では**貝塚**を形成するほど大量に貝類を捕獲し、ほかにも魚やウミガメ、クジラなども捕まえていたようです。こういった食料を石や骨を加工した道具で捕まえ、**石器**や**貝匙・土器**といった道具で調理して食べていました。

現在、先史時代の遺跡は町内で 29 か所みつかっています。



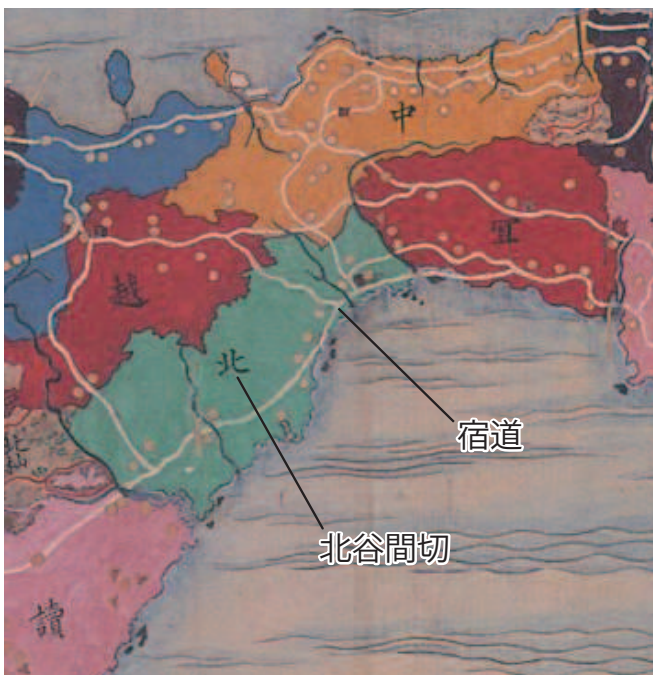
先史時代の遺跡 (北谷町公文書館により加筆)

グスク時代～近世

11 世紀頃に始まるグスク時代の生活は、狩猟・漁労・採取から農耕へ移行します。鉄器が広まることで農業生産が安定し人口が増え、各地に農村集落が発生すると、それを率いる**按司**が登場し階級社会が展開しました。按司たちはグスクを築いてお互いに争いを繰り返す、14 世紀初めごろ**北山・中山・南山**の三山が成立しました。三山はそれぞれ中国と**冊封**関係を結び、**進貢貿易**を中心として大きく栄えましたが、1429 年に**尚巴志**によって三山統一

され**琉球王朝**が誕生しました。本町唯一の本格的な城跡である**北谷城**や、グスク時代の遺跡からも**青磁**や**古銭**といった貿易品が出土しています。

近世という時代は、1609 年の**薩摩藩**による**琉球侵攻**から、1879 年に琉球王国が廃止されて沖縄県となった琉球処分までの 270 年間をさし、日本の江戸時代とほぼ同じ時代です。この頃に、現在の市町村にあたる**間切**の範囲が決まり、現在の**国道**のもととなった**宿道**や、**橋・屋敷**とよばれる集落がつくれます。また、**玉城朝薫**(1684-1734)や**平敷屋朝敏**(1701-1734)など、多くの文化人によって琉球伝統芸能が誕生し、今につながる人々の暮らしができあがります。



琉球国之図 (沖縄県立図書館所蔵)

戦前の北谷（近代）

行政

沖縄の近代は、琉球処分から沖縄戦までの66年間をいいます。この頃は沖縄が政治・行政・経済・社会・教育・思想などのあらゆる分野で日本社会に組み込まれ、同化されていきます。また、その中で沖縄の独自性が存続された時代でもあります。琉球処分の当初は、それまでの制度の大枠を残し緩やかな改革をおこなう旧慣温存策きゅうかんおんぞんをとりました。本格的な制度改革が始まると、土地制度・租税制度の導入をはかるために土地整理事業が実施され、間切は町村へ、間切番所まぎりばんしよは役場へと改称されました。

経済

第一次世界大戦(1914～1918)後に好景気にわいた日本経済は、終戦から2年目の1920年(大正9)には一転して戦後恐慌きょうこうにみまわれました。

沖縄県でも砂糖価格の暴落が続き、追い打ちをかけるように製帽はたおりや機織りの不振、豚コレラが流行するなど、経済は一気に不況となりました。この頃の庶民は、サツマイモさえ口にすることができず、ソテツを食べて飢えをしのぎました。ソテツは古くから飢餓時の食糧として植えられていましたが、有毒成分があり食べる場合は発酵と水洗いを十分にしなければ中毒や、時には死に至ることもありました。この時期に、各地でソテツ中毒による死者が出たことから「ソテツ地獄」と言われるようになりました。



ソテツ



市場のようす

交通

近世の北谷は、首里・那覇と国頭を結ぶ交通の要所のひとつでした。近代になると急速に交通網が発達します。1920年に国頭街道は県道となり、多くの馬車・人力車・乗合バスなどが那覇と国頭を往来するようになりました。1922年(大正11)には沖縄県営軽便鉄道嘉手納線けいびんかてなが開通します。これによって、北谷は中頭地域なかがみの人や商品、農産物など物資の集積地・輸送地としての機能を持つようになります。県営軽便鉄道は沖縄戦直前の空襲で破壊されるまで重要な交通機関として営業されていました。



普天間川ふてんまにかかる軽便鉄道嘉手納線の鉄橋跡
(1980年代)



北谷国民学校

浜川御願

平安山

伊礼



字伊礼青年團 浜川線路上にて

戦前の軽便鉄道の線路上で撮影された写真です。場所は
はまがわ
旧字浜川集落のあたりだと考えられます。



北谷トンネル (1932年 (昭和7))

現在の国道58号はもともと琉球王府の幹線道路が廃藩置県により県道に認定されたものです。明治30年代に改修着工した際、難路であった北谷城の北にある池城に、1905年(明治38)に沖縄で最初の石造トンネル「北谷トンネル」が開通しました。第二次世界大戦期の1944年(昭和19)に軍需物資の運搬に支障をきたしたため、日本軍によって天井部分が壊されました。翌年4月3日までに、上陸した米軍によって道路の幅が広げられトンネルは完全になりました。

▼ 空中写真 (1945年 (昭和20) 2月 沖縄県公文書館蔵)



北谷村役場 (1935年 (昭和10) 頃)

戦前の北谷村役場は現在の嘉手納基地の中にありました。北谷小学校や平安山駅などの公共施設が集中したこの地域は、当時の北谷村の中心地でした。



平安山駅

沖縄県営鉄道は、1914年(大正3)に開業し、沖縄戦の直前まで営業した重要な交通機関でした。那覇—嘉手納間の22.45キロメートルの嘉手納線は、1920年(大正9)に着工し1922年(大正11)3月28日から営業を始めました。嘉手納線は沖縄でも有数のサトウキビ作地帯を走っており、製糖工場と那覇港を結ぶ作業場の重要路線でした。

戦火をくぐりぬけて

沖縄戦

1941年(昭和16)12月8日、日本軍は米国ハワイ州の真珠湾を奇襲攻撃したあと、米英に宣戦布告し沖縄戦へとつづくアジア太平洋戦争が始まりました。日本軍は宣戦布告から半年でアジア太平洋の広大な地域を占領していきますが、1942年(昭和17)ミッドウェー海戦で大敗したのを境に各戦線で連合軍の大反撃を受け、以後は敗北の一途をたどりました。戦線が沖縄に近づいてきた1943年(昭和18)、日本軍は沖縄島の読谷山村(現読谷村)、北谷村屋良(現嘉手納町)、浦添村(現浦添市)仲西に飛行場を建設しました。翌1944年(昭和19)には大本営直轄の沖縄守備軍・第32軍が創設されました。

米軍は1945年(昭和20)3月26日に慶良間諸島を占領したあと、4月1日に沖縄島中部の北谷と読谷にかけての海岸から上陸し、北と南の両方向に進撃しました。北部は、日本軍の配備が手薄だったこともあり、大きな戦闘はなく米軍の一方的な攻撃にさらされました。一方、南部では首里の日本軍総司令部を中心に浦添一帯で激しい戦いとなりました。武器弾薬や食料・医療品など物資の豊富な米軍に対し、食べ物さえ事欠く日本軍は戦いどころではなく敗退を続け、ついに本島南端の摩文仁にいたって逃げ場を失い、6月23日第32軍司令官の自決によって日本軍の組織的な戦いは終わりました。

砂辺のナガバーマを上陸する米軍

(1945年(昭和20)4月1日 沖縄県公文書館蔵)

この日、米軍は早朝から激しい艦砲射撃を加えた後、上陸用舟艇でいつせいにリーフを乗り越え、読谷から北谷にかけての海岸から上陸を開始しました。ここから「アイスバーグ作戦」と呼ばれる沖縄攻略作戦が本格的に展開します。ナガバーマは現在の砂辺馬場公園と嘉手納町水釜の間にある嘉手納基地の陸軍貯油施設内にある砂浜です。



空爆される砂辺地域(1945年(昭和20)4月2日 沖縄県公文書館蔵)

TBM(雷撃機)による砂辺近くの交通路に対する爆撃の様子。



桑江での配給(1945年(昭和20)4月2日 沖縄県公文書館蔵)

北谷村桑江の桑江駅付近にあった製糖工場の倉庫前で、米の配給券を手にした住民が配給を受けています。



1号線沿いの第6小飛行場(1945年(昭和20)5月 沖縄県公文書館蔵)

米軍上陸後すぐにつくられた野戦飛行場。現在の国道58号沿いキャンプ・フォスター南側にありました。第二次世界大戦の終結で廃止され、跡地は広い平坦地に米陸軍の後方支援部隊を集中させ、物資集積場や車両整備工場(モータープール)などが設けられました。

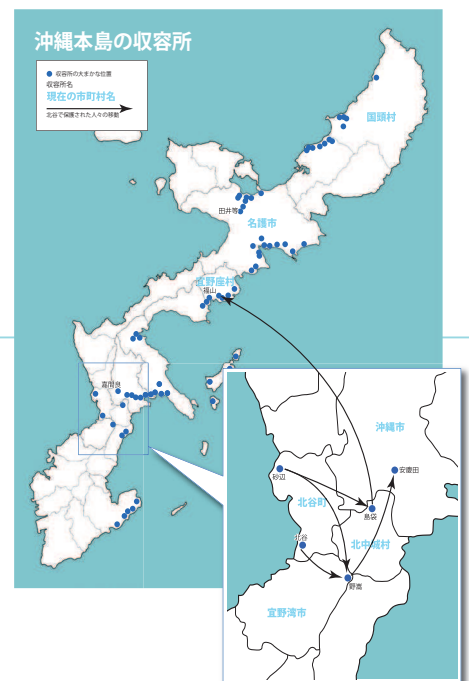
戦争と北谷の人々

1945年(昭和20)2月、戦線が沖縄にいたるのに備えて、中南部市町村の住民の北部への避難が提案されました。北谷村民の退去先は北部の羽地村(現在の名護市羽地)が指定され、北谷村役場羽地分所を設け、職員を派遣して生活に必要な準備にあたらせました。当初は、退去先での生活や家財道具を残して家を空けることへの心配などから、退去はあまりすすみませんでした。しかし、1945年(昭和20)3月から始まった米軍の空襲や艦砲射撃で状況は一変しました。この攻撃で民家のほとんどが焼け、人々は命からがらに防空壕に逃げ込みました。米軍の砲火のすさまじさを体験した人々は、準備もそこそこに北へ北へと避難を続けました。1945年(昭和20)4月1日、米軍は北谷と読谷にかけての海岸から沖縄本島へ上陸を開始します。ここを起点に沖縄本島の北と南の両方向への進撃をはじめ、住民を収容所に保護していきました。

そのため、米軍が沖縄本島に上陸した4月1日に村内に仮設された難民収容所で戦後生活をスタートした者もいれば、戦闘に巻き込まれながら逃げ回った先で米兵に保護され近くの収容所に収容された者など、各地で戦後生活をスタートすることになりました。

沖縄本島の収容所(『読谷村史第5巻』275頁より加筆・作成)

多くの北谷村民が羽地村へ退去を開始する前に米軍の艦砲射撃が始まったので、実際に山原に退去した者はわずかでした。そのため、米軍が上陸した4月1日に村内の仮設難民収容所で戦後生活をスタートした者もいれば、戦闘に巻き込まれながら逃げ回った先の収容所に収容された者など、各地で戦後生活をスタートすることになりました。しかし、中部の収容所は人数がすぐにいっぱいになったため、別の収容所へ移される人々もいました。



しまぶくろ 島袋の収容所(1945年(昭和20)4月6日 沖縄県公文書館蔵)

現在の北中城村島袋集落は米軍の一大難民収容所として利用されました。米軍上陸後に北谷と砂辺の仮収容所に収容されていた住民は、4月5日に米軍の車両や徒歩で島袋収容所に移されました。そこで、17歳から45歳までの男性をえり分けて米軍の作業を行う特別作業員として収容し、一般収容所では瓦葺き家に数所帯・十数人も押し込められ、狭苦しい生活をおくりました。

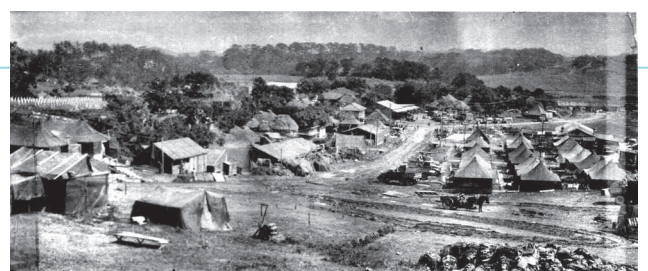


収容所の設営(1945年(昭和20) 沖縄県公文書館蔵)

アメリカ軍は4月中旬ごろ沖縄本島北部の羽地村田井等(現名護市羽地)に軍政府を設けて避難民を収容しました。



かまら 沖縄市嘉間良の収容所(1945年末～1946年 沖縄市総務課 市史編集担当蔵)



郷里への帰還 - 帰村 -

人口移動

1945年(昭和20)10月30日、島民に移動が許可されると人々は元の居住地に帰っていきましたが、基地建設が進んでいた北谷村に帰村の許可は下りませんでした。そこで北谷村は現在の沖繩市嘉間良^{かまら}に仮役所を設置し、戦前の居住地への帰還要請を重ねました。他の市町村に遅れること1年の1946年(昭和21)10月22日に軍民会議に提出された北谷の移動要請がようやく受け入れられ、北谷村の一部地域へ移動が許可されました。翌月には先遣隊^{せんけんたい}が派遣され、住居の建設や食料栽培を始めました。翌年2月5日には村民の移動を促進するため、役所を嘉間良から上勢頭^{かみせど}先遣隊事務所に移転し、さらに住民移動を目前にひかえた2月19日には字桃原^{とうばる}に米軍の廃材を利用した木造トタン^{ふき}葺の庁舎を建設しました。

帰村が始まると、桃原^{じやあがる}・謝苺^か・嘉手納^かの三区が新設され、派出所や販売所・診療所などの公共施設も相次いで整備され、初等学校も開校に向けて準備をはじめました。しかし、基本台帳^{きほんだいちょう}などの文書類をことごとく焼失していたため、配給や労務供出、在籍・学齢児童の把握に支障が生じ、住民をよく知る旧役場職員や旧区長を優先して帰村させることとなりました。第三次村民移動を最後に軍政府からの移動助成はうち切られ、その後は自力での移動となりました。大多数の村民は1947年中に村へ復帰しましたが、土地の大部分を基地に占有され生活の見通しがたたないことから、帰郷を見合わせる者もいました。

人口移動二関スル件(1946年(昭和21)10月25日)

最初の帰村場所である桃原^{とうばる}と上勢頭^{かみせど}地域への移動許可書。



住民移動許可(1947年(昭和22)12月24日)

4番目に北谷村に出された移動許可書。
吉原栄口原^{よしはらえぐちばる}、宇久殿原^{うくどうんばる}、謝苺原^{じやあがるばる}の一部が居住地域として許可されました。



北谷村配車使用状況調(自1947年(昭和22)4月25日 至5月25日)

移動の許可を受け、先遣隊による準備が整うと村民の移動が始まりました。輸送は沖繩民政府工務部から派遣されたトラック数台を使用しました。移動は1947年(昭和22)2月25日に遠隔地の北部地域から行われました。この文書では日ごとに移動した人や物資の数を報告しています。

先遣隊事務所 (1946 年 (昭和 21))

上勢頭の大毛に建設された先遣隊事務所。

先遣隊は建築と農耕の2隊に編成されており、事務所はおもに住宅資材の収容と隊員の合宿所に使われていました。1947 (昭和 22) 年 2 月 5 日、村民の移動を促進するため、村役所が越来村 (当時) ^{かまら} 嘉間良から先遣隊事務所に移転してきます。村民が帰村した直後は、米軍の配給食料と農耕隊が栽培した芋などを使って共同炊飯していました。



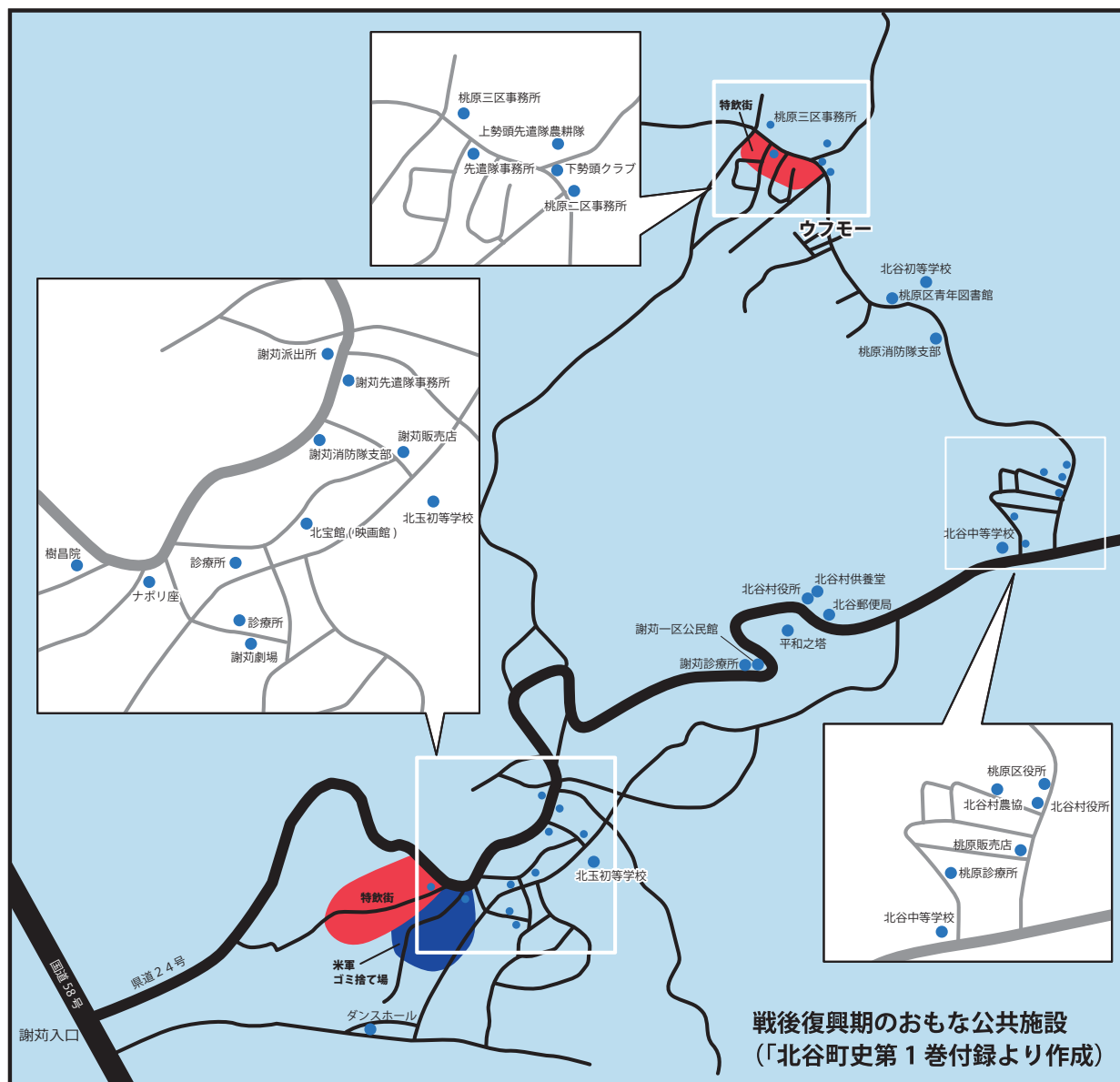
標準住宅 (1946 年 (昭和 21))

標準住宅 (ヒョウジュンヤ、キカクヤ) と呼ばれる ^{せんさいふつこう} 戦災復興住宅。

大きさは 12 坪・5 坪・3 坪の 3 種類あり、二間×二間半の規格で、材料は廃材や米軍政府支給資材を利用して建てられました。骨組みは ^{ツーバイフォー} 2×4 インチの角材を五寸釘で留め、屋根はススキやチガヤを葺き、テント布を張って壁にしていました。



戦後初期の謝苺 (1946 年 (昭和 21))



戦後処理

終戦後の1952年(昭和27)に日本本土では軍人・軍属などの公務上の傷病や死亡等に関し、国家補償の精神に基づいて援護を行うための「戦傷病者戦没者遺族等援護法」(援護法)が制定されます。当時、米国統治下にあった沖縄は援護法の適用外となりますが、沖縄の人たちは援護法の適用を強く求め、1953年(昭和28)3月に琉球諸島及び大東諸島にも適用されることになりました。

援護事務は兵士などの生死や負傷状況、身分などを確定する復員処理を元に行います。地上戦があったため人的被害が大きく、戸籍をはじめとする様々な資料が焼失したことや、米国統治下であることなど複数の理由から、援護法が適用されるまでの約7年の間に沖縄では復員処理はほとんどされていませんでした。

そこで、まず復員処理を促進するために「調査票」にもとづいて死亡公報を発行し処理を進めることになりました。また援護の対象についても、沖縄戦に動員された多くの学徒たちは、当初は直ちに身分が認められない場合があります。一般住民についても、軍と直接の雇用関係がないという理由で援護の対象ではありませんでしたが、1959年(昭和34)4月から「戦闘参加申立」が認定された者は準軍属扱いとなりました。

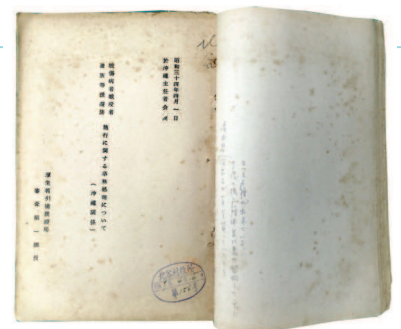
死亡報告書綴 昭和23年以降(1948年(昭和23))

佐世保地方復員局から出された、サイパンなどの外地に出兵した兵士の死亡報告。



沖縄未帰還者調査票(1957年(昭和32))

この資料では、鉄血勤皇隊所属の未帰還者について報告されています。沖縄戦では鉄血勤皇隊として14歳から17歳までの少年兵も招集されましたが、陸軍省令規則のみが法的根拠であったため、無効な防衛招集であったとして軍籍を認められませんでした。後に調査検討され、軍人となることが確定し援護法の対象となりました。沖縄戦では生死や負傷状況が不明確な事が多く、このような「調査票」に基づいて復員処理がなされました。



戦傷病者戦没者遺族等援護法施行に関する事務処理について(沖縄関係)(1959年(昭和34)4月1日)

地上戦が行われた沖縄では、援護の対象者が著しく多いうえ、一般戦災者との識別が難しく、戸籍などの身分や死因について証明する資料が滅失散逸したという特殊な事情から援護事務がとどこおっていました。この文書では、先に述べた根本的な問題の解決は難しいが、厚生省(当時)と琉球政府や市町村援護担当の綿密な協力と調整によって事務処理をすすめていくよう働きかけています。

援護のあゆみ(1958年(昭和33)6月)

1953年(昭和28)に援護法が沖縄に適用されると、復員・援護・恩給の3つの業務がほぼ同時進行で処理されることとなりました。立証資料の消失や戦災者の数が膨大であることなど、大きな困難をともなった諸事務は開始から6年目にしようやく軌道に乗りました。これを区切り、この時点までの経緯をまとめ沖縄住民に援護事務へ関心を向けてもらうことで、援護処理を促進する目的で「援護のあゆみ」が発刊されました。

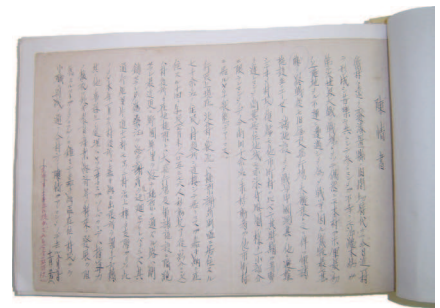


基地に囲まれて

嘉手納村の分村

他の地域より復興がはやかった嘉手納区は^{かてな}帰村からまもなく、またたく間に人口が膨れ上がりました。同じ頃に嘉手納基地が整備拡張され、1948年(昭和23)5月頃には管理が強化されて基地内全面立ち入り禁止となりました。そのため、^{とうばる}桃原の村役所への道路が遮断され、嘉手納から謝苅を經由していくか、越来村を大きく迂回しなければならず、往復も半日かかりとなりました。同年7月2日に「市町村制」が公布され、市町村事務に関する条例を設けることが可能になり、これを受けて11月5日の第1回北谷村議会で嘉手納の分村案件が全会一致で承認されました。その後、11月10日付で沖縄民政府あてに嘉手納村の分村に関する陳情書が提出され、12月4日に分村が正式に許可され嘉手納村が誕生しました。

分村に関する陳情書(1948年(昭和23)11月10日)



^{あざ}地籍字の再編と土地調査

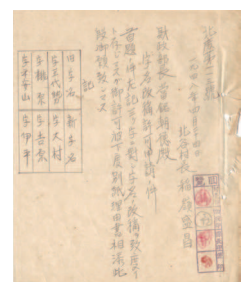
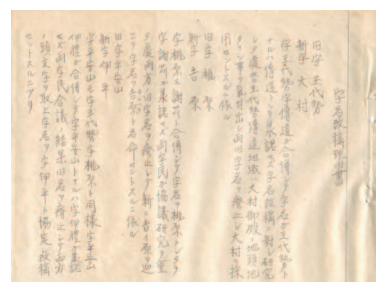
戦時占領期は「ヘーグ陸戦法規」を根拠として、米軍は無償軍用地を使用していましたが、対日講和条約発効後は戦時占領も終わることから、土地使用の合法化と地代支払いの検討をはじめました。沖縄戦で土地関係の公簿や公図・登記簿などが消失し、地籍不明の状態にあったため、まず土地の所有権を確認公証するための資料を収集する地籍調査が行われることになりました。

北谷村は字ごとの面積の差が大きく、米軍施設も多いことから土地調査の上で多くの支障があったため、調査の前に民政府へ地籍字の再編を申請しました。これによって、1947年(昭和22)10月29日までに12字が20字に再編されました。しかし、合併された一部地域で新しい字に対する反発が大きく、翌年4月24日に^{あざ}字名改称許可申請が出され、字名がそれぞれ改称されました。

北谷村の地籍調査は1948年(昭和23)から1949年(昭和24)にかけて実施されました。測量に関する知識の不足と器具の不備が原因で作業がやり直しになったり、敷きならされた境界不明地の図面作成など非常に苦勞の多い調査でした。その成果は、「土地所有権証明」(米軍政府特別布告第36号)にもとづき、北谷村では、同年4月27日に土地所有権証明書の交付を開始し、土地調査を終了しました。

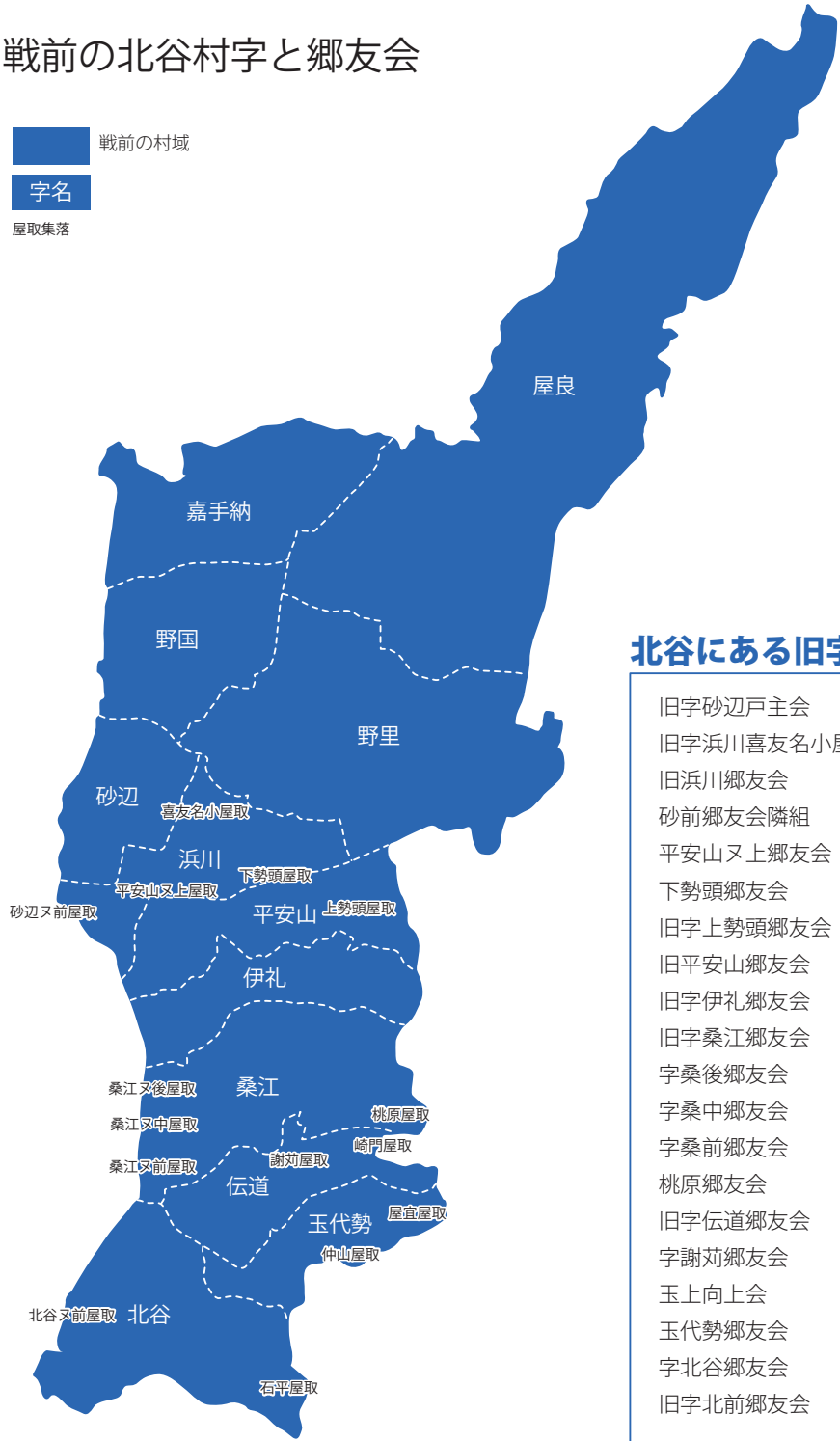
^{あざ}字名改編許可申請ノ件(1948年(昭和23)4月24日)

北谷村では地籍調査の前に字を12字から20字に編成し直しました。しかし、^{たまよせ}玉代勢に合併された^{でんどう}伝道や、^{とうばる}桃原に合併された^{じゃあがる}謝苅、^{はんざん}平安山に合併された^{いれい}伊礼地域では新しい字名に対する反発が大きく、この「字名改編許可申請」が出されました。申請は許可され、^{おおむら}玉代勢は大村、^{よしはら}桃原は吉原、^{いへい}平安山は伊平へと字名が改称されました。



戦前の北谷村字と郷友会

■ 戦前の村域
 ■ 字名
 ■ 屋取集落



北谷にある旧字郷友会

- 旧字砂辺戸主会
- 旧字浜川喜友名小屋取郷友会
- 旧浜川郷友会
- 砂前郷友会隣組
- 平安山又上郷友会
- 下勢頭郷友会
- 旧字上勢頭郷友会
- 旧平安山郷友会
- 旧字伊礼郷友会
- 旧字桑江郷友会
- 字桑後郷友会
- 字桑中郷友会
- 字桑前郷友会
- 桃原郷友会
- 旧字伝道郷友会
- 字謝苺郷友会
- 玉上向上会
- 玉代勢郷友会
- 字北谷郷友会
- 旧字北前郷友会

戦前の北谷村字と郷友会

郷友会とは、一般的に仕事などを求めて郷里を離れた人々が異郷において結成する同郷集団とされますが、ここでいう郷友会は、米軍の土地接收によりふるさとを奪われた人々が結成した同郷結合組織をさします。北谷町は嘉手納飛行場・キャンプ桑江・キャンプ瑞慶覧・陸軍貯油施設の4つの米軍施設が町総面積の約半分を占めており、戦前北谷村のあった集落（旧字）の多くが今も集落の全域あるいはその一部が米軍によって接收された状態にあります。旧字住民たちは郷友会を結成し、所有財産の管理や伝統行事・親睦行事の実施、葬儀の際の互助などを行っています。

社会制度の大きな変化 - 復帰 -

復帰運動

対日講和条約の締結を前にした1951年(昭和26)4月、沖縄群島で琉球日本促進期成会が結成され、復帰署名運動が展開されましたが、対日講和条約の締結後は米軍の強い圧力で停滞していました。その後、復帰運動の組織的再建をはかるため1960年(昭和35)4月28日に沖縄県祖国復帰協議会が結成されました。

1969年(昭和44)琉球政府主席選挙で初の公選主席として、基地の「即時・無条件・全面返還」をかかげた屋良朝苗^{やらちようびょう}が選ばれました。1971年(昭和46)10月19日に、戦後はじめて沖縄住民代表が参加した国会で、沖縄の「施政権返還及び祖国復帰に関する法律」が承認・決議され、1972年(昭和47)5月15日の日本復帰が実現しました。しかし、この国会で採決された沖縄返還協定は沖縄県民が求めていた基地のない平和な沖縄とはかけ離れたものでした。協定が審議されている最中、屋良主席は協定の見直しを求める建議書^{けんぎしよ}を国会に提出しようとしたが、審議は主席の到着を待つことなく衆議院特別委員会で強行採決されました。

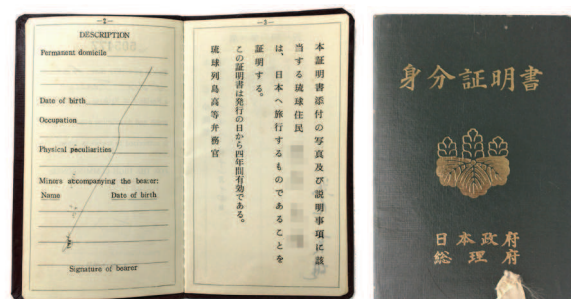
復帰運動(1960年代)

対日講和条約締結後の祖国復帰運動は、米軍の強い圧力で停滞していましたが、1960年(昭和35)4月28日に県内の各種団体が結集して、沖縄県祖国復帰協議会(復帰協)が結成され、同年4月28日に沖縄返還国民総決起大会が開かれるなど、復帰運動が高まっていきました。



日本渡航証明書(左)と身分証明書(右)

米国統治下の沖縄から日本本土へ渡航する場合はパスポート(渡航証明書)が必要でした。「日本渡航証明書」の赤い表紙は沖縄から日本本土への渡航、紺色は日本以外の外国への渡航と2種類のパスポートが琉球列島米国民政府から発給されていました。逆に日本本土から沖縄へ渡航する場合は、日本の総理府発給の「身分証明書」が必要でした。



沖縄で流通した通貨

米国統治下の沖縄は日本復帰までに7回の通貨制度を経験してきました。

無通貨時代(1945年4月1日～1946年4月14日)

住民のほとんどが収容所で生活していました。金銭取引は禁止され、米軍の配給物資に依存する生活でした。

第一次通貨交換(1946年4月15日施行)

通貨経済が復活しました。B円(B型軍票)が発行されました。

第二次通貨交換(1946年8月5日実施)

新日本円への移行が沖縄本島のみ実施されました。宮古・八重山ではB円と新日本円の二本だて通貨制でした。

第二次通貨交換の修正(1947年8月1日指定)

沖縄本島で、B円を再び法定通貨に指定し新日本円と二本だて通貨制になりました。

第三次通貨交換(1948年7月21日実施)

琉球全域でB円に統一されました。

交換レートは1ドル=120円

第四次通貨交換(1958年9月16日～20日)

通貨はすべて米ドルへ移行しました。この期間にB円がドルに交換されました。

第五次通貨交換(1972年5月15日より)

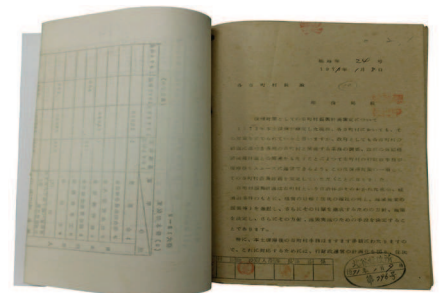
日本復帰に伴う最後の通貨交換です。米国ドルから日本円に交換されました。交換レートは1ドル=305円。

復帰対策

日本復帰にあたって、通貨交換や730(ナナサンマル)などの日本の制度に一体化するための復帰対策特別措置や、米国統治下で遅れている沖縄の経済及び社会開発に必要な資金を供給する金融公庫の設置、沖縄県に対する政府の対策を総合的に推し進める沖縄開発庁の設置、そして米軍用地及び軍用施設を引き続き米軍に提供するための特別措置など、多くの復帰対策がとられました。振興開発などの特別措置として10年間を1期間とする「沖縄経済振興開発計画」を作成し、本土との格差是正や経済の自立をめざしてきました。復帰から40年経過した現在は第5期目にあたり、沖縄振興特別措置法が抜本的に改正され、計画主体も国から沖縄県に移行された「沖縄21世紀ビジョン(沖縄振興計画)」が実施されています。

復帰を機に北谷村でも振興計画が策定・実行されました。「北谷村第一次振興計画(1972年～1981年)」では道路・上下水道・公共施設などの社会資本が整備され、それにともない市街地が拡大し人口が急増しました。

復帰対策としての市町村振興計画策定について(1971年(昭和46)1月8日)
高度経済成長期だった日本本土と、米国統治下の沖縄の経済格差は非常に大きなものでした。復帰にあたって格差是正および振興開発のため、「沖縄経済振興開発計画」が策定されました。日本政府の長期計画と関連を持つことで行財政事務が円滑に進むように、市町村も振興計画を策定することになりました。



通貨交換(1972年(昭和47)5月)

最後の通貨交換は、わずか6日間で住民の手持ちのドル通貨を日本円に交換しました。通貨交換前の1971年(昭和46)8月に米ドルの変動相場制が導入されるとドルの価値は急激に下落していきました。変動相場制以前の1ドル=360円に対し、この時の交換レートは1ドル=305円でした。

写真は謝苅にあった沖縄相互銀行(現 沖縄海邦銀行)前の様子です。



右側通行区分現状維持の推進の件について(1970年(昭和45)12月18日)

1970年(昭和45)11月20日閣議決定「第一次沖縄復帰対策要綱」の「道路および歩行者の通行区分を復帰後3年以内に本土並み左側通行へ移行する」件を受けて、右側通行区分現状維持推進協議会より北谷村長宛に出された要望書です。世界的に見て右側通行が多いこと、交通事故増大の懸念や、変更に伴う費用負担などを理由に右側通行維持を訴えています。



730(ナナサンマル)(1978年(昭和53)7月30日)

米国統治下の沖縄の交通方法は米国と同じ「車は右、人は左」でした。復帰に伴い交通も日本と同様に切り替えることになりました。「車は左、人は右」の交通方法変更は、実施された日が1978年7月30日であったことから730(ナナサンマル)と呼ばれています。事前に広報などで呼びかけや周知が行われましたが、変更直後は事故が多発したようです。

この写真は、北谷村役場職員が謝苅交差点で730に関する注意ビラを配っているところです。



旧ナポリ座付近 (1963(昭和38)年 沖縄県公文書館蔵)

町道ナポリ線から県道24号方面が撮影されています。
左側にある三和相互銀行はこの後、営業譲渡され同年8月に
沖繩銀行謝苺支店となりまして、
現在、沖繩銀行謝苺支店は北谷交差点に移転しています。



2009年(平成21)



謝苺湯 (1963(昭和38)年 沖縄県公文書館蔵)

長い煙突のある建物は、謝苺にあった銭湯「謝苺湯」です。



2013年(平成25)



軍道1号線と北谷城 (1963(昭和38)年 沖縄県公文書館蔵)

軍道1号線は、現在の国道58号にあたり、写真は北谷交差点付近を北向けに撮影しています。左手に安良波海岸があり、
右手の小高い丘は北谷城です。



2009年(平成21)



浜川付近の軍道1号線 (1970年代)

現在の国体道路入口付近から南向けを撮影しています。左手のうっそうとした原野を切り開いて県道23号(国体道路)が開通します。奥にあるエンゼルホテルは現在のアジアホテルです。



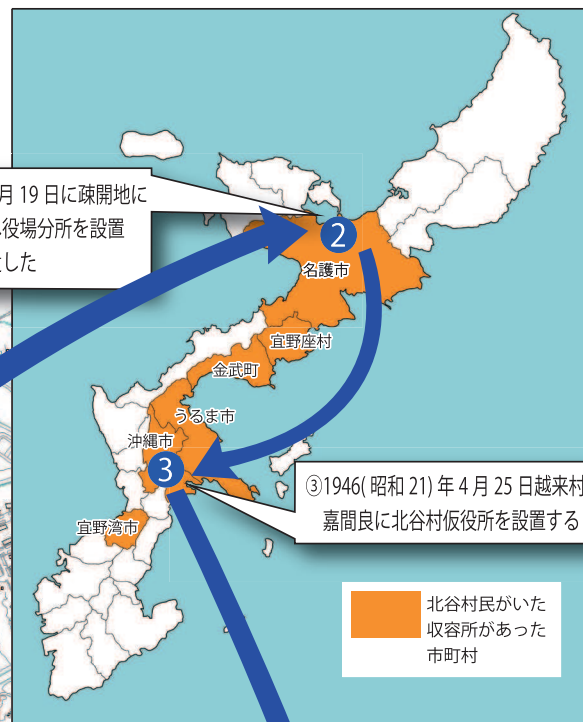
行政のうつりかわり

北谷の役場変遷



① 戦前の当時、北谷村の中心地だった浜川にあった北谷村役場

② 1945(昭和20)年2月19日に疎開地に指定された羽地村へ役場分所を設置
常駐職員3名を派遣した



③ 1946(昭和21)年4月25日越來村嘉間良に北谷村仮役所を設置する

北谷村民がいた
収容所があった
市町村



④ 上勢頭の大毛にあった先遣隊事務所
1947(昭和22)年2月5日に嘉間良から仮役所を先遣隊事務所に移転

⑤ 1947(昭和22)年2月19日、桃原一区(吉原520番地)に木造トタン葺庁舎が建設される



⑧ 1998(平成10)年に桑江226番地に建設された現在の北谷町役場



⑦ 1961(昭和36)年に吉原10番地に建設された北谷村役場



⑥ 1950(昭和25)年4月に謝苺一区に建設された木造トタン葺庁舎

じゃあがる

謝 莉一区にあった北谷村役所 (1959 年 (昭和 34) 1 月)

前ページ⑥の位置にあった北谷村役所で元旦にそろった職員一同。写真1段目の中央にいる青年は当時の北谷村長・崎浜盛永氏です。北谷で最年少の34歳で村長に就任しました。



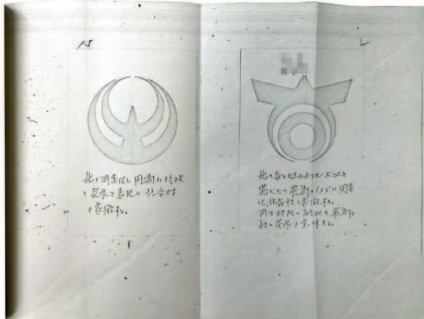
新庁舎落成記念 (1961 年 (昭和 36) 4 月)

前ページ⑦の位置 (吉原 10 番地) に建設された北谷村役所の職員一同記念写真。同じ場所に現在は北玉児童館があります。



村章の制定に関する要領 (1972 年 (昭和 47))

北谷では戦前を通して村章が制定されていませんでしたが、日本復帰という大きな節目をきっかけに村章を公募しました。多くの応募の中から審査の結果、福岡県の方のデザインが採用され、1973 年 (昭和 48) 4 月 2 日に村章が制定されました。



町制施行 (1980 年 (昭和 55) 4 月 1 日)

北谷町制が施行された日に、当時の島袋雅夫町長 (左) と花城可金議長 (右) が役場の看板を付け替えました。

北谷音頭・北谷町の歌 (1980 年 (昭和 55))

北谷町の歌と北谷音頭は町制移行を機に制定されました。

どちらも一般公募から選定し、制作されたレコードは希望者及び各公民館などに提供されました。



北谷町役場新庁舎 (1998 年 (平成 10))

新庁舎 (桑江 226 番地) は基地返還を見込んだ上で、キャンプレスター基地の中心部に敷地及びアクセス道を米軍と共同使用する形で建設されました。



北谷町新庁舎落成記念 (1998 年 (平成 10) 4 月)

新庁舎の落成記念誌。庁舎のコンセプトと施設紹介とともに、建設事業概要や当時の行政機構図も掲載されています。

発展する北谷町

米国統治下の村づくり

戦前の北谷では約8割が農業従事者でしたが、戦後は広大な平坦地は基地の用地として優先的に確保され、民間はその残りを利用する形になりました。そのことで農業は衰退し、多くの人が軍作業などの第三次産業へ従事しました。また、利用可能な土地が分断されたことで発展に不可欠な整合的な土地利用が非常に難しくなりました。

1953年(昭和28)以降、北谷村では基地接收による住宅地の不足から人口が伸び悩んでいました。1960年代後半には、^{たまがみ}玉上・^{よしはら}吉原・^{くわえ}桑江などの山間部地域が民間主導で宅地開発されました。また、^{はまがわ}浜川地先の埋め立てによる町域の拡張も図られました。村営住宅の建設もすすめられ、1971年(昭和46)6月に最初の村営住宅が^{えぐち}栄口に完成し、1973年(昭和48)にはコザ市から北谷村東部をぬけ国道58号に接続する県道23号(国体道路)が開通しました。

埋め立て中の宮城地域(1976年(昭和51))

復帰前の1963年(昭和38)に日本政府援助で^{すなべ}砂辺・^{はまがわ}浜川地先の公有水面埋立が開始されました。その後、1967年(昭和42)に沖縄興発会社によって浜川地先公有水面がさらに埋め立てられました。1977年(昭和52)には浜川小学校が開校します。



開発中の栄口地域(1973年(昭和48))

1950年代、基地ゲート近くに軍人・軍属相手の商業地帯が形成されました。そういった基地関係の仕事を求めて、本島北部や周辺離島・奄美・先島などから多くの人が北谷村内に流入するようになり、住宅地が飽和状態になりました。そのため、50年代後半から宅地開発が活発化しました。1967年(昭和42)頃からは^{よしはらえぐちばる}字吉原栄口原を中心とする山間部が大規模に開発され、住宅地として供給されました。



北谷村初の公営住宅 建設中の栄口団地(1970年(昭和45))

当時の北谷村は、総面積の7割が軍用地に接收され、用地が少ないため住宅を求めることが困難で、高価な家賃で間借りしているものが少なくない現状でした。そこで、住宅難の解消と低所得者層へ低廉な家賃で賃貸することによって住民の生活の安定と社会福祉の増進を図ることを目的に、1970年度から3年計画で公営住宅の建設を推進しました。



建設中の県道23号(国体道路)(1973年(昭和48))

1970年(昭和45)に^{かてな}嘉手納飛行場の一部・^{かみせど}上勢頭地域が返還され、復帰記念事業として1973年(昭和48)の若夏^{わかなつ}国体開催時に国道58号とコザ市(現沖縄市)を結ぶ^{くわえ}県道23号(国体道路)が開通しました。これに伴い、上勢頭地区と桑江地域の宅地開発が本格化しました。

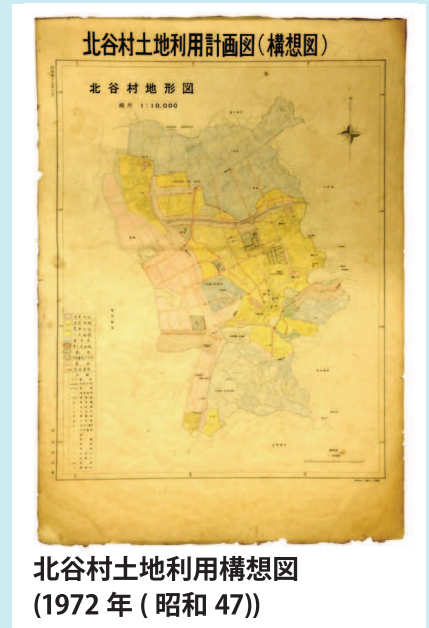


振興計画とまちの発展

北谷村では、1972年(昭和47)に第一次振興計画(1972年～1981年)が策定され、長期的な展望の下に総合的なまちづくりがはじまりました。第一次振興計画では、基地経済から脱却した平和産業の自立を図る「商業観光住宅都市」を理想像として掲げました。道路・上下水道などがある程度整備され、市街地が拡大することで人口が急増し、1980年(昭和55)には町制へ移行しました。

第二次振興計画から第四次総合計画(1982年～2011年)では、米軍基地の整理・統合がすすみ、1981年(昭和56)ハンビー飛行場とメイ・モスカラ射撃訓練場が返還され、軍用地跡地の計画的利用が始まりました。1998年(平成10)には、返還をみこんでキャンプ・レスター内に役場新庁舎が建設されました。また、現在の美浜区にあたる桑江地先の大規模な埋め立てもおこなわれ、アメリカンビレッジ構想にもとづく美浜地区が誕生しました。コースタル・コミュニティ・ゾーン整備計画(CCZ)による西海岸の護岸や公園の整備などとともに、県内外から多くの人が集まる活気にあふれたまちとして発展をはじめました。

現在進行中の第五次総合計画(2013年～2021年)では、西海岸一帯の活性化と水産業の振興等を目指したフィッシャリーナ整備事業や、キャンプ桑江北側地区を職住近接型の賑わいと自然環境が調和した市街地の形成として桑江伊平土地区画整理事業が進められています。



ハンビー飛行場(1976年(昭和51))

1951年(昭和26)、現在のハンビー地区に建設され、1981年(昭和56)12月31日に全面返還された小型飛行機用の飛行場。海兵隊のヘリコプター基地として使用されました。建設当初はズケラン飛行場と呼ばれていましたが、沖縄戦で戦死した米陸軍飛行士ハンビー中尉にちなんで、1960年(昭和35)9月17日にハンビー飛行場と改称されました。

基地返還後の安良波海岸(1983年(昭和58))

ハンビー飛行場が返還された後の安良波海岸。護岸の整備がまだ始まっていないこの頃からサーフィンを楽しむ人々が集っていました。奥に見える煙突と建物は、白比川河口付近にあった沖縄電力株式会社・北谷火力発電所です。



ハンビー地区開発 (1992 年 (平成 4))

ハンビー地区は、土地区画整理事業の完了した 1991 年 (平成 3) 頃から大規模小売店舗 (ハンビータウン) や各種専門店が集積する商業地域として発展しました。1994 年 (平成 6) に安良波公園が、2001 年 (平成 13) にはアラハビーチが完成しました。



桑江地先の海岸 (1976 年 (昭和 51))

1981 年 (昭和 56) に返還されたメイ・モスカラ射撃訓練場跡地の効率的な土地利用を図るため、西側海岸 (通称桑江地先) に公有水面埋立が実施されました。これをきっかけに西海岸地域の整備が本格化しました。

写真は埋立前の桑江地先海岸で、北谷漁港付近から桑江中学校向けを撮影しています。

桑江の海岸と伊平地区 (1970 年代)

現在の美浜区にあたる場所は桑江地先と呼ばれる遠浅の干潟でした。左手の伊平地区は戦後から軍用地に使用され、2003 年 (平成 15) に返還されました。この写真は、国道 58 号沿いを国体道路入り口付近から南向けに撮影されています。



美浜地区の開発 (1988 年 (昭和 63))

北前から美浜までの海浜部は 1987 年にコースタル・コミュニティ・ゾーン (CCZ) として建設大臣の認定を受け、護岸や公園整備がおこなわれました。美浜地区の北谷公園には 1989 年 (平成元) にサンセットビーチがオープンし、1987 年 (昭和 62) 開催の海邦国体の会場となったソフトボール場を始め、陸上競技場や屋内運動場 (北谷ドーム) が次々と完成しました。



美浜タウンリゾート・アメリカンビレッジ (2000 年 (平成 12))

1994 年 (平成 6) に美浜タウンリゾート・アメリカンビレッジ開発基本指針を策定し、北谷町の産業振興や雇用の場の確保と地域活性化を目的としたリゾート産業の推進を図りました。1997 (平成 9) 7 月に映画館の開業を皮切りに様々な商業施設が立ち並ぶ賑わいのあるまちが形成されました。



フィッシャリーナと桑江伊平地区 (2014 年 (平成 26))

現在すすめられているフィッシャリーナ整備事業は、西海岸一帯の更なる活性化と水産業の振興等を目的としています。桑江伊平土地区画整理事業は、2003 年 (平成 15) 3 月に軍用地から返還された区域が大部分で、返還に先立ち建設された町役場庁舎を中心とした町政業務拠点および、商業地と住宅地が近接し自然と調和した市街地を形成しています。



町民活動の足場 - 公共施設 -

戦後、村のほとんどが軍用地となった北谷では、多くの村民は帰村後も元の居住区に戻れませんでした。戦前からの地域のつながりが絶たれた北谷の人々は、行政区を単位として自治活動を始めました。北谷町では行政サービスの提供や地域活動の中核は自治会が担っており、各区公民館が活動の拠点として機能しています。

また、競技場や生涯学習施設のニライセンターなどでは町主催の各種イベントが行われ、生活に根ざした学習や健康増進などに貢献しています。

① 産業総合展示会 (1982年 (昭和 57))

1952年 (昭和 27) の農畜産物を品評する「産業共進会」からはじまり、1971年 (昭和 46) には総合展示会に改め、家庭や婦人会・生活改善グループも手作りの食品や小物を出品するようになりました。



② シーポートちやたんカーニバル (1988年 (昭和 63) 5月)

西海岸をまつりで広く県内外にアピールしたいと、町商工会青年部地域活性化事業として始まりました。第1回は北谷漁港で開催され、第2回以降はサンセットビーチが会場となっています。現在は実行委員会での開催となっています。





③ 中央公民館 (1976年(昭和51)4月)

1976年4月に開館し27年間、北谷の人々の生活に根ざした学習や健康増進を図る交流の場として活用されました。2階には村民図書室が設置されていました。建て替えにより、2004年(平成16)にちやたんニライセンターが開館しています。



④ 盆踊りの夕べ (1980年(昭和55)8月)

町民のレクリエーションの日常化を目的として、1975年(昭和50)から桑江総合グラウンドで開催されました。



⑤ 海邦国体 (1987年(昭和62)9月)

北谷公園ソフトボール場では女子ソフトボール競技が行われました。



⑥ シーポート北谷トロピカルトライアスロン大会 (1992年(平成4)7月)

青少年健全育成と地域活性化を目的に、北谷町CCZ・北谷公園をメイン会場に1992年(平成4)から2001年(平成13)まで開催されました。



教育の移り変わり

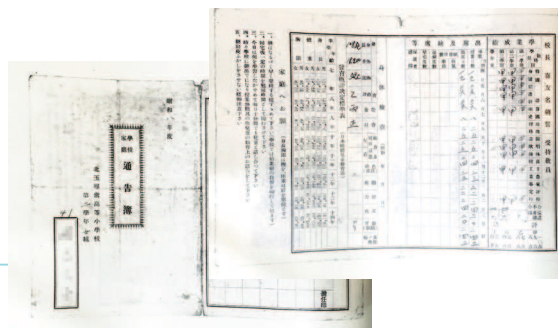
戦前の教育

1882年(明治15)、北谷間切番所の中に北谷間切小学校が開校しました。その後、法律の変更に伴い北谷尋常小学校となり、さらに1902年(明治35)には高等科が設けられ北谷尋常高等小学校へと名前が変わりました。1914年(大正3)、北谷尋常小学校の分教場が北玉尋常小学校として開校しました。1917年(大正6)には高等科を設け北玉尋常高等小学校となりました。

1941年(昭和16)に尋常小学校は国民学校へと変わりました。修身・国語・歴史・地理が「国民科」に統合され、体操なども「体練科」に変わり軍事的色彩が強くなりました。戦時中は学生生徒は学徒動員として飛行場拡張工事や防空壕設営など、授業時間を軍工事へあてることが多くなりました。また、親元を離れて九州などの県外に疎開する学童もいました。

通告簿 北玉尋常高等小学校(昭和8年度 沖縄県公文書館蔵)

戦前の北玉尋常高等小学校2年生の成績表。



北玉尋常高等小学校(1938年(昭和13)3月)

昭和13年3月発行の卒業記念写真帖の集合写真です。

戦後の教育

1946年(昭和21)に初等学校が8年、高等学校を4年とする4・8制を実施し、本格的に戦後教育が再開されました。帰村が他市町村より1年遅れた北谷村では、1947年(昭和22)に北谷初等学校と北玉初等学校(どちらも1952年(昭和27)に北谷小学校・北玉小学校に改称)が開校されました。焼け野原からの再出発で十分な予算がなかったため、米軍の物資をもらい受け、保護者や生徒たちの奉仕作業で校舎が作られました。

学校の制度が4・8制から小学校6年、中学校3年、高校3年の6・3・3制に改定された1948年(昭和23)には、北谷中等学校が設立され、4月に桃原一区の診療所跡地に開校し、9月に米軍の野球場跡だった現在の場所に移転しました。

1977年(昭和52)、砂辺・浜川地先の埋め立て地(字宮城)に浜川小学校が新設されました。それまで北谷・北玉のどちらの小学校も遠く、通学の利便性を考慮して嘉手納小学校に委託していた砂辺地区の児童を引き取りました。

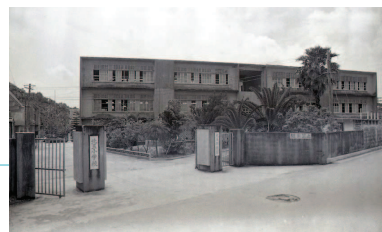
本土復帰前後から北谷でも軍用地返還と山間部開発に伴う区画整理事業などが進み、人口の増加をみました。そのため、北谷小学校の児童数が急増し、その対策として1979年(昭和54)に北谷第二小学校が開校しました。1981年(昭和56)には、桑江中学校が北谷中学校から分離開校しました。

昭和 20 年北谷国民学校卒業式 (1982 年 (昭和 57))

1945 年 (昭和 20) 3 月に予定されていた北谷国民学校の卒業式は、米軍の大空襲から続く沖縄戦への突入で開催されることはありませんでした。37 年後の 1982 年 (昭和 57) に北谷小学校百周年記念期成会が中心となって卒業式が挙行政され、当時の校長・いなみせいしやう稲嶺盛昌先生から卒業証書が授与されました。



北谷小学校・北谷幼稚園 (1972 年 (昭和 47)) ▶



◀ きたたま北玉小学校・北玉幼稚園 (1974 年 (昭和 49))



はまがわ ▶ 浜川小学校 (1982 年 (昭和 57)) ▶



◀ 北谷第二小学校 (1982 年 (昭和 57))



北谷中学校 (1953 年 (昭和 28)) ▶



◀ くわえ桑江中学校 移転パレード (1981 年 (昭和 56))

4 月開校後、校舎が完成するまで北谷中学校の校舎を間借りしていました。写真は 12 月に北谷中学校からの移転分離パレードのようすです。

英国ブレア首相招聘 (2000 年 (平成 12) 7 月)

英国船籍インディアンオーク号乗組員を救助した歴史的経緯から、九州・沖縄サミットの際に英国ブレア首相を招聘して歓迎交流会を北谷小学校で開催しました。さらに平成 13 年度から町中学生の英国派遣交流事業がはじまりました。



学校給食

1964 年 (昭和 39)、北玉小学校敷地内に共同調理場 (左写真) が建設され、2 小学校 1 中学校に学校給食が開始されました。その後、浜川小学校・北谷第二小学校と桑江中学校が新設され、従来の共同調理場では対応できなくなり、1979 年 (昭和 54) に学校給食センター (右写真) が、北谷第二小学校に隣接した場所に建設されました。

北谷の芸能と文化

伊礼原遺跡 (2000年(平成12)7月)

「伊礼原遺跡」は、2010年(平成22)に国指定史跡となりました。この遺跡は、ウーチヌカーの湧水を中心とした縄文時代からグスク時代までの約7,000年間の生活様式や自然環境をうかがい知ることができます。低湿地区からは木の実を水に浸けて保存した^{ザル}筴や木製品の^{くし}櫛など貴重な遺物が出土しました。



北谷城 (1976年(昭和51))

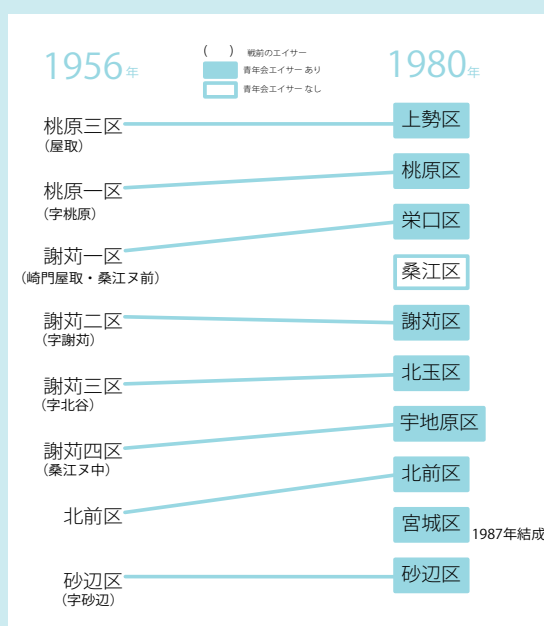
北谷町に唯一現存するグスク北谷城は沖縄県で五指に入る規模の大きな城です。東西に連なる^{くるわ}郭をもち、^{しゅつど}出土遺物から12世紀以前に始まり15世紀中頃に終焉したと考えられています。また、城内には北谷町指定民俗文化財「^{あがりのうたき}東ノ御嶽」や「^{タウン}殿」などの^{はいしよ}拝所も存在します。



北谷のエイサー

北谷のエイサーは、戦前まで各^{あざ}字単位で行われていました。その当時すでに^{なかがみ}中頭地域はエイサーが盛んで、特に北谷村のエイサーはテンポの速さと動作の機敏性が県下に知れ渡っており、お盆のころは遠方から北谷までエイサーを見に来る人も多かったといえます。

戦後は軍用地に接収され戦前の居住地に戻ることができなかつたため、住民自治の基盤は^{あざ}字から行政区へと移行しました。これに伴い、戦前まで各字単位で行われていたエイサーも、行政区単位で行われるようになりました。



北谷村エイサー祭り (1975年(昭和50))

北谷村エイサー祭りは1964年(昭和37)にはじまります。当初は各区青年会ごとのコンクールの形をとっていましたが、1972年(昭和47)からカチャーシー大会など観客も一緒に楽しめる祭りとしての開催になりました。



綱引(1986年(昭和61)8月)

北谷・玉代勢・伝道の三カ村は12年に1回、寅年に大綱引きを行います。

沖縄戦によってしばらく中断しましたが、1974年(昭和49)に戦後1回目の大綱引きが再開されました。写真は戦後2回目の大綱引きのようすです。この時はハンビー飛行場跡地で開催されました。



フェーヌシマ(1986年(昭和61)8月)

フェーヌシマは、豊作や無病息災をもたらすものとして、^{ムラアシ}村遊びや豊年祭に演じられる棒踊りのことです。北谷町では、字北谷で保存・継承され、大綱引きのとき余興のひとつとして演じられます。



獅子舞(1985年(昭和60)9月)

獅子舞の獅子は、普段は村落内の^{シシヤ}獅子屋に手厚く安置され、村遊びや豊年祭など村落の祭ごとの際に持ち出されます。北谷町では、字北谷・^{すなべ}砂辺・^{いれい}伊礼に獅子舞が伝わっています。特に字伊礼の獅子舞は獅子の他に2頭の猿が登場するといった特徴があります。



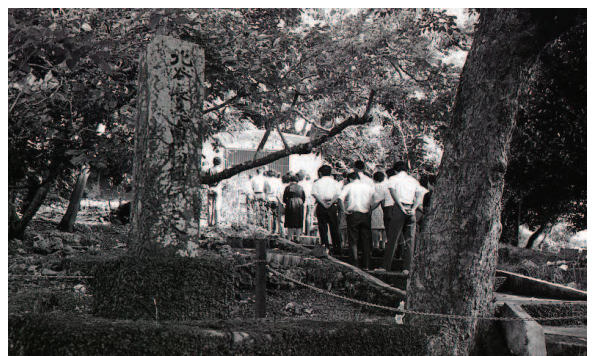
村芝居(1973年(昭和48)9月)

村芝居は、おもに旧暦8月15夜に集落の広場で芝居や舞踊・歌劇・組踊などが行われます。写真は字^{すなべ}砂辺の八月十五夜で演じられる「^{ちやうじゃ}長者の^{うふしゆ}大主」的一幕です。



北谷長老祭(1970年代)

沖縄にはじめて仏教の臨済宗妙心寺派を伝えたといわれる北谷長老(南陽紹弘^{なんようしやうこうぜんし}禅師)を讃える行事で、毎年旧暦9月15日に町主催で行われます。元は北谷三カ村が旧暦3月3日に開催していましたが、1922年(大正11)に沖縄史跡保存会によって「北谷長老南陽禅師之塔」が建立されたのを記念して村祭に移行しました。



公文書館へようこそ！

公文書館ってどんなところ？

公文書館とは

公文書とは、役場などの行政機関が職務を遂行するために作成・取得される書類のことです。公文書に加えて、行政機関の作った統計書などの刊行物やパンフレット、さらに地域の活動を記録した写真など歴史的に価値のある資料を収集・整理・保存し、利用に供する施設が公文書館です。

北谷町公文書館ができるまで

北谷町公文書館は1992（平成4）年4月に町村で全国初の公文書館として開館しました。

1945(昭和20)年4月	沖縄戦により戦前の公文書がすべて失われる
1986(昭和61)年5月	「北谷町文書保管所」設置
1992(平成4)年4月	北谷町公文書館条例を施行 民間の建物を借用し、町村で全国初の公文書館設置
1998(平成10)年5月	役場新庁舎の完成に伴い、新庁舎内に移転



歴史公文書



刊行物や地域の資料

北谷町公文書館は、関係法規によって次のような目的と業務を与えられています。

公文書館法

第1条

この法律は、公文書等歴史的資料として保存し、利用に供することの重要性にかんがみ、公文書館に関し必要な事項を定めることを目的とする。

第3条

国又は地方公共団体は、歴史資料として重要な公文書等の保存及び利用に関し、適切な措置を講ずる責務を有する。



北谷町文書保管所

北谷町公文書館条例

第1条

本町に関する歴史的資料として重要な行政文書、古文書その他の記録（以下「文書等」という。）を収集し、及び保存するとともに、これらの利用を図り、もって学術及び文化の発展に寄与するため、北谷町公文書館（以下「公文書館」という。）を設置する。

第3条

公文書館は、次の業務を行う。

- (1) 文書等の収集、整理及び保存に関すること。
- (2) 文書等の利用に関すること。
- (3) 文書等の調査及び研究に関すること。
- (4) 文書等についての専門的な知識の普及啓発に関すること。
- (5) 文書等の目録、資料集等の編さん及び刊行に関すること。
- (6) その他公文書館の目的を達成するために必要な事業に関すること。



設置当初の北谷町公文書館

時を貫く公文書の流れ

公文書等の記録を通して意思決定過程を検証し、過去の経験を今後の社会形成に役立てることができます。



現在の北谷町公文書館
役場1階の入口右側にあります。

北谷町公文書館の役割

公文書館業務の流れ

北谷町公文書館では重要な歴史資料を適切に収集し、将来に渡って利用・保存するため次のような流れで業務を行っています。

収集

役場から年限の満了した文書が引き渡されるほか、団体や個人からの寄贈等により所蔵資料の充実を図ります。



寄贈を受けた資料

評価選別

受け入れた資料は、歴史資料として重要なものを選別し保存書庫へ移動します。評価選別の結果、保存しないことになった資料は廃棄処分します。



選別作業

目録整備

目録を整備し検索できるようにします。

保存処置

資料の劣化を防ぐために、専用の保存容器に入れ保護します。利用頻度が高い資料や原本の取り扱いが難しい資料はデジタル化等の代替物を作成します。また、劣化の激しい資料については修復等の必要な措置を検討し実施します。



一般書庫

保存

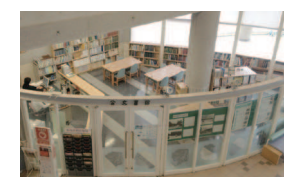
保存容器に入れた資料は適切な温湿度で管理された書庫に保管します。



耐火書庫

閲覧

利用者から請求された資料を閲覧に供します。資料に含まれる個人情報保護され、個人の権利利益を害するおそれがないまで利用に供することはありません。また、北谷に関する質問への対応（レファレンス）も行っています。



公文書館閲覧室

北谷関係年表 (昭和 20 年～平成 28 年)

本年表は『北谷町史 第 1 巻 附録』掲載の「北谷町の考古・歴史年表」を元に編集し、平成 7 年以降は町刊行物等の記載事項を追記しました。

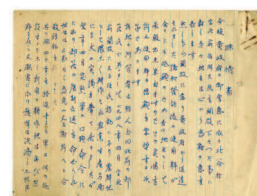
1945 年 (昭和 20)	2月 19日	北谷村民の疎開地は羽地村 (現名護市) に指定
	4月 1日	米軍中部西海岸地域の艦砲射撃 本島上陸
	6月 23日	第 32 軍牛島司令官 摩文仁で自決
1946 年 (昭和 21)	4月 4日	米軍政府、北谷村長に新垣實氏を任命
	25日	越來村 (現沖繩市) 嘉間良に仮役所設置
	7月 1日	北谷村長に稲嶺盛昌氏任命
	10月 22日	軍政府に北谷への移動を要請 (桃原と上勢頭地域が許可される)
1947 年 (昭和 22)	1月 6日	謝苺の一部地域が居住許可される
	2月 5日	村役所を嘉間良から大毛の先遣隊事務所に移転
	19日	役所庁舎桃原一区に移転 (木造トタン葺庁舎)
	25日	村民の復帰移動開始
	5月 1日	北玉初等学校開校 (幕舎 3 棟)
	6日	北谷初等学校開校
	31日	第 1 回北谷村慰霊祭
	6月 4日	北玉幼稚園開園
	22日	北谷村青年会結成
	7月 7日	北谷村婦人会設立
	8月 3日	基地建設工事地域として軍政府が北前の一部接收を通告
	9月 26日	北谷幼稚園開園
1948 年 (昭和 23)	12月 24日	吉原栄口原・宇久殿原・謝苺原の一部が居住地域として許可
	26日	北谷村教育会設立
	4月 8日	北谷中等学校が桃原一区 (診療所跡) に開校 北前地区の一部居住許可される
1949 年 (昭和 24)	24日	地籍調査に先立ち、字を 20 字に改編
	9月 8日	北谷中等学校字吉原 480 番地 (現在地) へ移転
	10月 10日	新選挙法により北谷村長に稲嶺盛昌氏就任
	12月 4日	嘉手納村 分村
1949 年 (昭和 24)	5月 14日	北谷初等学校全学年給食開始
	6月 9日	北谷幼稚園再開
1950 年 (昭和 25)	4月	役所庁舎、桃原から謝苺一区に移転 (木造瓦葺平屋 40 坪)
	11月 15日	村 長 渡慶次賀善氏就任 (2 期 8 年)
1951 年 (昭和 26)	10月 5日	村役所点灯
	11月 18日	北谷長老 300 年祭式典挙行
1952 年 (昭和 27)	2月 28日	初等学校を小学校に、中等学校を中学校に改称
	5月 9日	社会福祉協議会北谷支部結成
1953 年 (昭和 28)	4月 24日	軍人軍属遺族会北谷支部を結成
	5月 31日	北前地区の一部が開放
1954 年 (昭和 29)	3月 1日	滅失戸籍の申告届出開始
	31日	砂辺地区の一部が返還
	10月 10日	謝苺一区に「平和之塔」建設
1955 年 (昭和 30)	4月 16日	村役所に電話開通
	12月 1日	北前区・砂辺区の設置
1956 年 (昭和 31)	5月 5日	謝苺劇場改築落成
	7月 1日	コザ市昇格 桃原一区の一部、二区の一部がコザ市に編入
	10月 19日	北谷中学校ミルク給食開始
1957 年 (昭和 32)	6月 15日	浜川千原開放
1958 年 (昭和 33)	4月 5日	米軍病院落成 (キャンプ桑江)
	5月 2日	供養堂建立



p8 人口移動ノ件



p25 北谷中学校



p12 賃貸料の支払方要望

	5月27日	土地問題に関し北谷村住民大会
	11月	村長 崎浜盛永氏就任(2期7年)
1959年(昭和34)	2月24日	琉球政府援護課、北谷村未帰還者調査開始
	9月14日	桃原～謝苺入口 給水開始
1960年(昭和35)	1月25日	小中学校パン・ミルクの補食給食開始
	2月3日	失業対策(失対)事業開始
	3月29日	桃原にコザ保健所北谷公衆衛生看護婦駐在所設置
1961年(昭和36)	4月3日	役所新庁舎(字吉原10番地)に移転完了
	7月1日	簡易水道を上水道に改良(～1969年度)
	9月25日	『北谷村誌』(真栄城兼良編著)発行 定価2ドル
1962年(昭和37)	6月	北谷村屠場 桑江に完成
1963年(昭和38)	1月30日	北谷村職員労働組合結成
	3月20日	『北谷村広報』創刊
	10月10日	砂辺・浜川の公有水面埋立について同意決定
1964年(昭和39)	1月2日	北谷村消防団条例公布
	8月10日	桑江射撃場からの流弾で男性1人死亡
	14日	謝苺の民家に米軍射撃場から流弾が飛び込む
	10月2日	砂辺海岸に米軍ジェット戦闘機が墜落して炎上
1965年(昭和40)	6月30日	村立第一保育所竣工(開所:昭和41年4月1日)
	12月12日	村長 比嘉正章氏就任(3期12年)
1966年(昭和41)	8月3日	字の区域の変更について可決(浜川・砂辺地先埋立地の編入)
1967年(昭和42)	9月5日	北谷村老人クラブ連合会結成(9月5日)
	11月16日	北玉小学校敷地内に小中学校共同調理場設置
1968年(昭和43)	2月7日	村給食総合センター竣工
	3月4日	小中学校で完全給食実施
1969年(昭和44)	1月	砂辺地域に上水道給水開始(水道事業完了)
1970年(昭和45)	6月30日	県道23号線(国道道路)新設による返還(228千平方m)
1971年(昭和46)	1月13日	毒ガス移送のため各校臨時休校(9月7日～10日再度休校)
	3月	浜川地先埋立行政区域に編入
	4月27日	コザ市、北谷村共同ゴミ処理場竣工
	6月7日	「字宮城」誕生
	25日	村営栄口住宅(A棟一種)竣工
1972年(昭和47)	1月18日	北谷村PTA協議会結成
	4月15日	砂辺水道ポンプ場竣工
	5月15日	復帰記念式典(那覇市民会館) 「北谷村役所」を「北谷村役場」に改称
	8月1日	北谷村立第2保育所開所
	30日	北谷村営グラウンド竣工
	9月2日	第1回エイサー祭り
1973年(昭和48)		県道23号(国道道路)開通
	4月2日	北谷村章制定
	5月3日	若夏国体(復帰記念沖縄特別国民体育大会)開催(～6日)
1974年(昭和49)	3月1日	第一次北谷村振興計画書発刊
	7月21日	北谷村古典芸能同好会結成
	8月18日	「北谷三ヶ村大綱引」戦後初開催
	9月27日	北谷村商工会設立
	12月	『北谷村統計書』創刊(昭和49年版)
	1日	第1回古典芸能発表会
1975年(昭和50)	4月1日	北谷村立第3保育所開所(字上勢頭)
	22日	村営砂辺住宅完成(5月1日入居開始)
	5月	佐阿天川を二級河川に指定し、名称を「普天間川」に統一
	10月	字桑江に「ちゃたんゴルフ練習場」開業(村内初)
1976年(昭和51)	2月15日	北谷村供養堂移転新設(うぐいす谷墓地公園)



p10 沖縄未帰還者調査票



p18 新庁舎落成記念



p25 共同調理場



p15 通貨交換



p19 県道23号(国道道路)

	2月15日	北谷村中央公民館竣工
	4月8日	沖縄県立北谷高等学校開校
	8月2日	北谷村民図書室、図書貸出開始(1992町立図書館に改称)
	9月18日	第1回村民盆踊り大会
1977年(昭和52)	2月	第1回村民マラソン大会
	12月12日	村長 島袋雅夫氏 就任
	15日	「村民カレンダー」作成
1978年(昭和53)	4月1日	浜川小学校開校・浜川幼稚園開園 北谷消防団、消防本部・署に改組
	6月28日	上勢頭土地区画整理組合設立(1987.6.11 解散)
	7月2日	第1回チャリティー郷土芸能公演(北谷村民生委員ら)
	17日	北谷村役場屋上に航空機騒音測定器設置
	30日	交通方法変更(730)車右側通行⇒左側通行へ
	11月5日	第1回北谷村民運動会
	12月2日	第1回北谷村婦人演芸の集い
	23日	北谷村社会福祉協議会 社会福祉法人化
1979年(昭和54)	2月20日	第1回美化コンクール(北谷村婦人会)
	3月31日	村立学校給食センター竣工
	4月1日	北谷第二小学校開校・北谷第二幼稚園開園 役場内に指定金融機関窓口設置
	5月6日	謝苺一区に屋外運動場完成
	11月18日	北谷村書道振興会結成
	28日	北谷村写真愛好会結成
1980年(昭和55)	3月10日	第二北前橋完成(旧佐阿天橋)
	15日	北谷町消防庁舎落成
	4月1日	町制施行 初代町長 島袋雅夫氏 就任 北谷町の歌の制定・北谷音頭の制定
	7月1日	行政区新編成 10区
	11月21日	北谷町老人福祉センター・商工業研修等施設落成
1981年(昭和56)	4月1日	北谷町立第4保育所開所
	8日	桑江中学校開校式(生徒354名、校舎完成まで北谷中に間借り)
	19日	北前区公民館落成
	24日	上勢頭北公園供用開始
	5月2日	砂辺屋外運動場完成
	12月19日	桑江中学校分離式(以後、桑江中校舎にて学校運営)
	12月31日	ハンビー飛行場返還(1983-90年度北前地区土地区画整理事業) メイ・モスカラ地区返還(1985-92年度桑江地区土地区画整理事業)
1982年(昭和57)	2月10日	第1回北谷町教育長杯ソフトボール大会
	12日	第1回町民書道展
	4月1日	町花「フィリソシンカ」・町木「センダン」制定
	3日	宮城区公民館落成
	10日	砂辺区公民館落成
	12日	ハンビー飛行場跡地で沖縄戦遺骨調査(～19日)
	5月14日	字伊平「クランモー(蔵森)」返還
	16日	ゲートボール場「北谷あしびなゝ」供用開始
	6月29日	「第二次北谷町振興計画基本構想」可決
	10月20日	北谷町更生保護婦人会結成
	11月14日	第1回町民総合文化祭
	21日	昭和20年北谷国民学校卒業式
	27日	北谷小学校創立100周年記念式典
1983年(昭和58)	1月23日	第1回北谷町社会福祉大会
	2月1日	各区公民館に館長・主事設置



p23 盆踊りの夕べ



p25 浜川小学校



p25 北谷第二小学校



p18 町制施行



p20 ハンビー飛行場



p25 北谷国民学校卒業式

- 4月 1日 「北谷町民憲章」制定
砂辺ゴルフ場返還(1986-88 砂辺地区土地区画整理事業)
- 3日 栄口区公民館落成
- 9日 宇地原区公民館落成
- 5月 11日 上勢頭南公園供用開始
- 6月 10日 「白比川の自然を残す会」結成
- 10月 第二次北谷町基本計画(1982～1991 年度)決定
- 11月 2日 沖縄電力 北谷火力発電所廃止
- 20日 第1回沖縄芸能鑑賞会(北谷町古典芸能同好会)



p20 安良波海岸

- 1984年(昭和59)**
- 2月 5日 第1回北谷町子ども会発表大会
 - 3月 25日 第1回町民囲碁大会
 - 4月 1日 北谷町 障害児保育開始
 - 23日 宮城児童公園供用開始
字上勢頭・下勢頭地域の自然と文化遺産を守る会結成
 - 6月 18日 第1回北谷町平和祈念祭(～23日)
 - 7月 20日 環境問題国際シンポジウム沖縄県北谷町大会(～23日)
 - 10月 9日 北前地区土地区画整理事業(～90年度 ハンビー飛行場跡)
 - 11月 3日 北玉区公民館落成

- 1985年(昭和60)**
- 1月 10日 第1回北谷町新春生花大会(～11日)
 - 3月 11日 北谷町議会、非核宣言決議
 - 4月 砂辺区で航空機騒音測定開始
 - 25日 港公園供用開始
 - 5月 3日 第1回 憲法講演会
 - 7月 21日 「ニライの都市・北谷町」を創造するまちづくりシンポジウム
 - 8月 4日 第1回 北谷町・広島平和交流団派遣(～9日)
 - 9月 14日 第1回 北谷町健康展(～15日)
 - 10月 13日 謝苅区公民館落成
 - 11月 19日 桑江地区土地区画整理組合設立(～92年度 メイ・モスカラ跡)
 - 30日 第1回 チャリティー芸能祭(北谷町老人クラブ連合会)
 - 12月 1日 第1回 北谷町婦人ソフトボール大会
 - 4日 第1回 防火駅伝(北谷町消防本部)
 - 22日 第1回子ども芸能祭(北谷町古典芸能同好会)



p21 桑江の海岸と伊平地区

- 1986年(昭和61)**
- 1月 5日 第1回 新春トリムマラソン大会
 - 23日 第1回 町民写真展(北谷町写真クラブ・北谷町教育委員会)
 - 26日 第1回 町民絵画展(北谷町絵画振興会・町教育委員会)
 - 2月 20日 北谷町文化協会発足
 - 3月 18日 桑江地先の公有水面埋立て許可(4月21日起工)
 - 6月 6日 第1回 盆栽展
 - 8月 3日 北谷三ヵ村大綱引(ハンビー飛行場跡地・戦後2回目)
 - 15日 非核宣言の塔モニュメント建立
平和を守る北谷町民の会結成
 - 10月 21日 上勢頭土地区画整理事業竣工
 - 26日 第1回 古典芸能発表会(北谷町文化協会)
 - 11月 3日 第1回 町民書道展(北谷町文化協会・北谷町教育委員会)
 - 24日 第1回 町民写真展(北谷町文化協会・北谷町教育委員会)
 - 29日 第1回 町民生花展(北谷町文化協会・北谷町教育委員会)
 - 12月 1日 第1回 芸能発表会(北谷町老人クラブ連合会)



p27 三ヵ村大綱引き

- 1987年(昭和62)**
- 1月 3日 第1回 町民新年会
 - 25日 第1回 北谷町民絵画展(北谷町文化協会・北谷町教育委員会)
 - 3月 10日 砂辺土地区画整理事業組合設立(～88年度砂辺ゴルフ場跡)
 - 5月 24日 第1回 シーポート北谷カーニバル
 - 7月 15日 沖縄県企業局 北谷浄水場 通水式
在宅心身障害者共同作業所「ニライの里」開所



p22 シーポートちゃたんカーニバル

	9月20日	海邦国体夏季大会開催(～23日)
	10月2日	桃原土地区画整理事業竣工、「字桃原」誕生
1988年(昭和63)	3月29日	桑江地先公有水面埋立て事業竣工認可
	31日	桑江公園供用開始
	6月4日	北谷海岸CCZ整備計画建設大臣認定記念式典
	8月16日	「字美浜」誕生
	10月1日	北谷公園ソフトボール場供用開始
	10日	第1回北谷町スポレク大会
1989年(平成元)	6月10日	サンセットビーチ一般供用開始
	8月10日	北谷町人口2万人達成
1990年(平成2)	4月14日	「字北前一丁目」「字北谷一丁目～二丁目」誕生
	9月30日	北谷公園陸上競技場 供用開始
	11月24日	北前にハンビータウンオープン
1991年(平成3)	5月27日	桃原地区土地区画整理事業竣工
	7月13日	桑江地区学習等供用施設(桑江体育館・桑江区自治会事務所) 落成記念に松を植樹して「丘の一本松の碑」建立
	10月7日	砂辺海岸に米軍上陸地モニュメント建立
	12月9日	授産事業所「青空」開所
1992年(平成4)	4月1日	北谷町公文書館設置
	7月5日	第1回シーポート北谷トロピカルトライアスロン(～第10回)
	9月1日	小中高校で学校週5日制スタート
1993年(平成5)	9月1日	町役場土日閉庁スタート
	11月1日	第三次北谷町振興計画基本計画(1992～2001年度)庁議決定
	12月12日	第5代町長 辺土名朝一氏 就任
1994年(平成6)	7月1日	安良波公園開設
	11月2日	美浜リゾート開発基本構想 発表
	12月1日	北谷公園野球場供用開始
	31日	字桑江・字吉原(キャンプ桑江の一部)返還
1995年(平成7)	3月11日	第1回北谷町生涯学習まつり
	31日	「北谷町民平和の日を定める条例」公布
	4月1日	「字美浜(一丁目～三丁目)」誕生
	10月22日	平和之塔 第二次世界大戦戦没者刻銘板除幕式
	11月1日	中日ドラゴンズ 北谷公園野球場で初めて秋季キャンプ
1996年(平成8)	3月15日	昭和20年北玉国民学校 卒業式
	4月27日	北谷町保健相談センター開所式
	9月8日	県民投票(日米地位協定の見直しと県内米軍基地の整理縮小)
1997年(平成9)	4月1日	「海と緑の健康地域(健康海岸)」指定(厚生省・建設省)
	7月12日	美浜リゾート用地内映画館ミハマ7プレックス開業
	10月18日	北玉区 遊び場・ゲートボール場開所
1998年(平成10)	2月1日	浜川小学校 創立20周年記念式典
	4月17日	役場新庁舎落成(桑江226番地)
	6月26日	上勢桑江児童館開館
	8月16日	北谷三ヵ村大綱引き(安良波公園)
	11月1日	北谷公園多目的屋内運動場(ドーム) 供用開始
	21日	北谷中学校創立50周年記念式典
	12月5日	町民ふれあい福祉まつり(～6日)
1999年(平成11)	2月15日	北谷第二小学校 創立20周年記念式典
	3月25日	北谷町地域振興券 交付開始(使用期限～9月24日)
2000年(平成12)	1月	町営駐車場 利用開始
	4月1日	町制施行20周年記念式典
	5月1日	上勢桑江公園 供用開始
	13日	G8サミット・文化フェスタ英国展(北谷町屋内運動場)
	7月21日	英国ブレア首相招聘(北谷小)九州・沖縄サミット(～23日)



p21 美浜地区の開発



p21 ハンビータウン開発



p23 トライアスロン



p25 ブレア首相招聘

	12月16日	桑江中学校創立20周年記念式典
2001年(平成13)	3月3日	第1回男女共同参画フェスティバル(～4日)
	4月1日	(社)北谷町シルバー人材センター設立(H24年4月公社へ移行)
	25日	安良波公園内アラハビーチ供用開始
	6月25日	第二次北谷町国土利用計画策定
	7月11日	宮城児童館落成
	8月15日	第1回北谷町中学生英語スピーチコンテスト
2002年(平成14)	2月2日	第1回中学生英国派遣交流事業(～8日)
	5月10日	美浜メディアステーション開所
	6月24日	第1回海外移住者子弟研修生受入事業(～12月23日)
2003年(平成15)	3月31日	キャンプ桑江北側返還
	4月1日	ニライ消防本部発足(北谷・嘉手納・読谷) 「美浜区」誕生 11行政区となる
2004年(平成16)	4月1日	ちやたんニライセンター開館(生涯学習プラザ・町立図書館)
	25日	砂辺馬場公園 供用開始
	26日	第四次北谷町総合計画 庁議決定
	5月1日	北谷公園温水利用型健康運動施設ちゅらーゆ オープン
	11月16日	美浜タウンリゾート・アメリカンビレッジ完成記念式典
2005年(平成17)	4月1日	家庭ゴミ有料化制度開始
	6月29日	北谷町在宅介護支援センター(吉原26番6)落成
	9月12日	北玉児童館開館
	12月12日	第8代町長 野国昌春氏 就任
2006年(平成18)	4月	北谷町地域包括支援センター開設
	10月	子育て支援センター開設(謝対保育園(吉原26番地1へ移転)内)
	11月30日	北谷町観光協会設立総会
2007年(平成19)	7月20日	北谷町うちなぁ家 落成
	10月22日	第1回北谷町観光協会フォトコンテスト
	31日	第1回美浜アメリカンビレッジハロウィン仮装コンテスト
2008年(平成20)	1月	障害者地域活動支援センター「たんぼぼ」開設
	2月3日	浜川小学校創立30周年記念式典
	6月22日	第1回北谷海岸ウォーキング会ウォークラリー
2009年(平成21)	2月1日	北谷第二小学校創立30周年記念式典
	3月19日	沖縄国際映画祭2009(アメリカンビレッジ及び近郊)
	4月24日	北谷・嘉手納・北中城ファミリーサポートセンター開所
	26日	美浜区公民館落成
	5月	北谷町、全国瞬時警報システム(J-ALERT) 運用開始
2010年(平成22)	2月22日	伊礼原遺跡 国指定史跡となる
	3月26日	町営新川墓地公園の設置(9月供用開始)
	8月18日	北谷町町制施行30周年記念式典
	11月24日	桑江中学校創立30周年記念式典
2011年(平成23)	2月12日	第1回C-1グルメバトル開催
	6月1日	健康トレーニングセンター ちゃとれ開所
2012年(平成24)	2月23日	うちなぁ家「旧目取真家主屋」及び「旧崎原家ふる」が 国登録有形文化財(建造物)となる
2013年(平成25)	10月	北谷町海業振興センター「うみんちゅワーフ」竣工
2014年(平成26)	2月26日	北玉小学校創立百周年記念式典
	3月31日	北谷町観光情報センターの設置
	6月26日	北谷町フィッシャーリーナ条例公布
	8月5日	第五次総合計画策定 庁議決定
2015年(平成27)	4月1日	北谷町子ども医療費助成制度 中学卒業まで通院・入院無料化
	7月1日	地域の消費喚起を目的として「ニライ商品券2015」発行
2016年(平成28)	2月12日	北谷町町民農園開園式
	3月31日	男女共同参画推進条例公布



p21 アメリカンビレッジ



p26 伊礼原遺跡



p21 フィッシャーリーナ

参考文献等

- 沖縄県公文書館ホームページ「琉球政府文書デジタルアーカイブ」
www.archives.pref.okinawa.jp/digital_archive
- 読谷村『読谷村史 第5巻 戦時記録 下巻』2004年3月
- 沖縄県教育委員会『沖縄県史料 戦後2 沖縄民政府記録1』 1988年3月
- 沖縄県生活福祉部援護課『沖縄の援護のあゆみー沖縄戦終結50周年記念ー』1996年3月
- 齊藤郁子「復員処理業務についての覚書と沖縄県福祉保健部 福祉・援護課文書の概要」
『沖縄県公文書館研究紀要 第16号』2014年3月
- 武田祐佳「沖縄県北谷町の地域特性-行政区を足がかりにしてー」
『軍用地と地域社会 研究成果中間報告書第一輯』2014年7月
- 武田祐佳「沖縄県北谷町の地域特性-旧字とのかかわりから」
『軍用地と地域社会 研究成果中間報告書第二輯』2016年3月
- 北谷町「北谷町新庁舎落成」1998年4月
- 北谷町役場『広報ちやたん 縮刷版 創刊号～第55号』1983年3月
- 北谷町役場『広報ちやたん 保存版 第56号～第103号』1990年3月
- 北谷町役場「広報ちやたん 平成8年～平成28年」
- 北谷村「北谷村振興計画書」1974年3月
- 北谷町「第二次北谷町振興計画 基本構想・基本計画」1984年2月
- 北谷町「第三次北谷町振興計画 基本構想・前期基本計画」1993年11月
- 北谷町企画課「第四次北谷町総合計画 基本構想・前期基本計画」2004年3月
- 北谷町役場総務部企画財政課「第五次北谷町総合計画 基本構想・前期基本計画」2014年8月
- 北谷町役場総務部企画財政課「第五次北谷町総合計画 基本構想・後期基本計画」2017年3月
- 北谷町総務部町長室「北谷町勢要覧2014」 2014年3月
- 北谷町教育委員会「英国派遣報告書」2002年3月
- 北谷町教育委員会『北谷町史 第1巻 通史編』2005年3月
- 北谷町教育委員会『北谷町史 第1巻 付録』2005年3月
- 北谷町役場『北谷町史 第3巻 資料編2 民俗上』1992年10月
- 北谷町役場『北谷町史 第3巻 資料編2 民俗下』1992年10月
- 北谷町役場『北谷町史 第5巻 資料編4 北谷の戦時体験記録上』1992年11月
- 北谷町役場『北谷町史 第5巻 資料編4 北谷の戦時体験記録下』1992年11月
- 北谷町役場『北谷町史 第6巻 資料編5 北谷の戦後』1988年11月
- 北谷町教育委員会『北谷町の地名』2006年3月
- 北谷町教育委員会『北谷町の自然・歴史・文化』1996年3月
- 北谷町教育委員会・北谷町中央公民館「閉館記念誌 中央公民館のあゆみ」2004年4月
- 北谷小学校創立百周年記念事業期成会『北谷小学校 創立百周年記念誌』1984年9月
- 創立八十周年記念事業期成会『北玉小学校 創立八十周年記念誌』1994年5月
- 北谷町社会福祉協議会「法人化10周年記念誌」1989年1月
- 北谷町社会福祉協議会「法人化20周年記念誌」1998年12月
- 沖縄県北谷町栄口区自治会「栄口区10年のあゆみ」

協力機関

沖縄県公文書館・沖縄市総務課市史編集担当・北谷町教育委員会社会教育課・北谷町総務部町長室

※ 所属先を明記していない資料は、北谷町公文書館の所蔵です。

※ 本図録掲載画像の無断使用および転載は禁止します。



北谷町公文書館 開館 25 周年記念企画展図録

北谷戦後七十年余の歴史

あの日あの時…

編集発行 北谷町公文書館

2017(平成 29)年 12 月

〒904-0192

沖縄県北谷町字桑江 226 番地

電 話 (098)-982-7739